2　要約問題

次の文章を読み、２５０字程度に要約せよ。

記録的なサンマ不漁　庶民の味絶やさぬために

1　安価で栄養が豊富な庶民の味覚として親しまれてきたサンマの不漁が深刻化している。日本の水揚げ量は昨年、前年比約６６％減の４万トン強に落ち込み、過去最低となった。 日本の水揚げ量は２０００年代には年２０万～３０万トン台で推移していた。だが、ここ数年は１０万トン前後と低迷してきた。業界関係者によると、昨年は「前例のない大不漁だった」という。

2　不漁の原因として、中国や台湾の乱獲が指摘されてきた。サンマは太平洋の公海を北上し、夏から秋にかけて日本近海に回遊してくる。近年は中国や台湾の大型漁船が公海上で大量に「先取り」するため、日本にサンマが入って来ないとの見方だ。　しかし、国立研究開発法人水産研究・教育機構によると、昨年は台湾の漁獲量も前年実績の半分くらいに落ち込んだとみられるという。 地球温暖化の影響で冷水域を好むサンマの回遊ルートが変わったとの見方もある。だが、最も懸念されるのは、取り過ぎによるサンマの資源量そのものの枯渇だ。 実際、北太平洋のサンマの資源分布を調べている同機構によると、０３年に４００万トン以上だった資源量が、１９年は９６万トン強に減ったという。

3　サンマの資源保護を巡っては、日中、台湾など８カ国・地域でつくる北太平洋漁業委員会（ＮＰＦＣ）が昨夏、初めて漁獲枠導入を決めた。 ただ、漁獲枠は公海と排他的経済水域（ＥＥＺ）で年計約５５万トンと最近の実績を１０万トン超も上回る緩い内容だ。国・地域別の漁獲割り当ても決まっていない。実効性を欠く規制では資源回復を期待できない。

4　北欧の漁業先進各国は科学的な資源調査に基づき、幅広い魚種について漁船ごとに漁獲枠を設けるなど、資源管理を徹底している。ノルウェーが１８、１９年にシシャモを禁漁にするなど、漁業の持続可能性のためには厳しい措置も辞さない。

5　恒例の東京・目黒の「さんま祭り」は昨年、冷凍ものでしのいだ。サンマの小売価格は例年の２倍以上に跳ね上がった。関係者には「そのうちサンマが取れなくなるのでは」との不安も広がる。 庶民の味覚を絶やさないために、日本は各国と協調して実効性のある資源管理を急ぐ必要がある。

毎日新聞 2020 年 1 月 27 日　東京朝刊を
一部改編した。

年　　組　　番　氏名

/50

点

※ヒント①…この文章の各段落の主題文に下線を引く。ただし、第２段落と第３段落には２カ所下線を引く。

※ヒント②…必要があれば、適宜、接続詞を加える。

※ヒント③…要約する際は具体例は省く。

※ヒント④…各段落の最初と最後の文は特に意識する。

→横書き（最初の一マスから書き始める。改段しない。）